南アルプス紀行

黒戸尾根～甲斐駒ガ岳～仙丈岳

十分会（三川）　早田正次

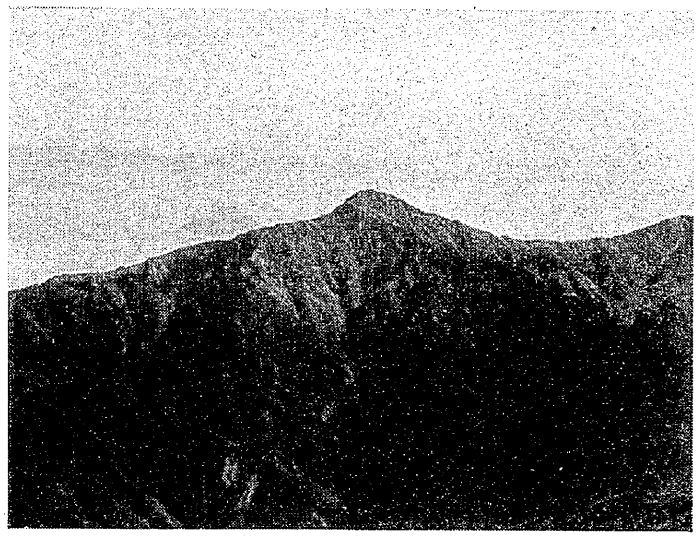
半世紀を生きてきた記念にと、昨年、南アルプス行きを計画したが、友の死（注・六月十一日吉田哲郎さんが三川鉱落盤災害で犠牲となる）という思いがけぬことが起こり、その計画を今年に延ばし実行した。

十九号台風の直後に大牟田を発ち、身延線を経て中央本線の韮崎で下車する。

韮崎から、さらにバスで五十分の横手に着き歩きはじめる。

横手駒が岳神社を経て約二時間台風で崩された沢に着く、日も落ちそうなので、ここを泊り場と決めテントを張る。

満天の星のもと、樹林と沢のせせらぎに包まれ南アルプスの第一夜は更けていった。



仙丈岳から見た　南アルプスの主峰北岳（3,192メートル）。左後方にうすく富士が見える。

昨日とはうって変り、体調は絶好調、天気も上々、胸ふくらむ期待感にはずむ足をじっと押えながら歩き出す。

しばらく行くと、平坦な笹の平に着き、一息入れる。昨夜ここで泊った単独行の人がテントをたたんでいる。朝のあいさつを交し出発。一時間も行くと、岩陵の〝刃渡り〟の峡、ここを慎重に渡る。次に木の桟橋にハシゴと登り切ると、「刀利天狗」などと刻み込まれた石碑や、祠などが無数に立っているところに出る。

駒が岳は宗教登山で開かれたのだろう。駒が岳教という教団もあり、その信徒の手によるものか、山道の両側にはいたるところに、石碑、石像、祠などが見られる。

五合目小屋に着く、おやじさんは屋根の修理中だった。二人の下山者と会う。二人とも重そうな三脚をリックの上につけている。駒ガ岳頂上でご来迎でも写してきたのだろう。

ここからは、ハシゴ、クサリが次々と現れ、重いリックを背負って垂直するクサリ場の登りはいくらか緊張させられる。

七合目小屋は改築のため取り壊し中だった。水を体と水筒に十分に補給し、しばらく行くと森林限界となり、花崗岩にはえたハイマツの間を進み、八合目で中食とする。八ガ岳が雲の上に堂々と浮び、北アルプス連峰が槍～穂高のラインをくっきりと見せ、ここからの眺めは実に雄大だ。

下からみる雪のように見える、白い花崗岩砂を踏みしめて駒が岳頂上（二千九百六十六メートル）に着く。自分の誕生日と登頂を記念して缶ビールで乾杯する。

そこには麓から九時間かけて、ひとつの頂点にたどり着いた実感と、それをなし得た体力に対する安堵感があった。

あとは下り三時間で北沢に着く。台風に荒された河原にテントを張る。夜中、あまりの寒さに目をさます。何時だろうかと灯をつけるとテントの内側についた水滴が氷となり、無数の星のように光り輝いた。

第三日目の目的は仙丈岳（三千三十三メートル）。北沢峠の長衛荘に寄りキャンプ料金を払い、おやじさんとしばらく話す。

仙丈岳へは、尾根通しの道を登るのみ。森林限界を過ぎると、南アルプスの主峰北岳と富士が競うように見えてくる。カメラに時間をとられながらも、出発から四時間で仙丈岳の頂に着く、ここからの眺めはまた格別。南アの全望はもとより、富士、八ガ岳、浅間山、秩父山塊、北ア、中央アと飽くことなき眺めだ。だが汗の引いた体には寒さが時を知らせ、すぐ下の藪沢カールに降りて中食をとる。

今日はこのカールで泊ることにして、中食後は全くただ一人の山を寝ころんだり、散歩したりして心ゆくまで楽しむ。

翌日は、五時に仙丈岳にふたたび登りご来迎を待つ。富士には笠雲がかかっている。天気が崩れる前兆だ。

雲が多く、すっきりしないご来迎となる。目ざめた北岳にこの次はお前に会いにくるぞと呼びかけ仙丈岳を下る。

このカールに二泊したという、東京の人と、藪沢新道を下る。雲もだんだん厚くなり尾根からガスも降りだした。実に天気に恵まれた山行きだった。あとは北沢峠に下り、戸台に出て伊那へ出れば帰りついたも同然だ。

開かれた北アルプスに対して、南アルプスはまだまだ未開の山といった感じに樹林帯、原生林を経ての頂上までのアプローチの長さには重量感がある。

南アルプスへの尽きぬ魅力を見い出した思いだった。

囚人労働遺跡を訪ねる ③

大浦廃坑

小崎文人

大牟田駅前のバス停から「米ノ山ゆき」のバスに乗る。瓦町で下車して、そのまま右手のアスファルト道路をたどります。

三井東圧化学の工場群の間をくぐようにそのまま歩きますと、やがて、アスファルト道路は左側の山手の方へ分かれます。その方へ進みます。

するといよいよ、山肌にぶつかる奥の、鉄条網でできた柵の向こうに坑口がひとつ、ぱっくりと口を開けています。それが大浦坑の大斜坑なのです。

すでに廃坑となったこの坑は、福岡、熊本、長崎の三県の囚人たちが働いていた炭坑というばかりでなく、世のなかを震撼させる事件が起こった坑として忘れることができません。

それは、明治十六年九月二十一日の夜のことでした。その日、大浦坑は福岡県の囚人六十人、熊本県の囚人七十七人、長崎県の囚人四十一人、それに良民坑夫（一般労働者）が二百十七人、計三百九十五人が働いていたとされています。ほかに、石炭運搬に使われる坑内馬の二十六頭がいました。

事件は、その日夜七時すぎに発生しました。おどろいたことに、熊本県の囚人労働者が、現に自分たちが働いている坑内に火を放って暴動を起こしたのです。辺り一面石炭だからたまりません。猛火はみるみるうちに広がり、そのなかを、人間と馬は逃げ回り、煙にのまれて次つぎに倒れていきました。

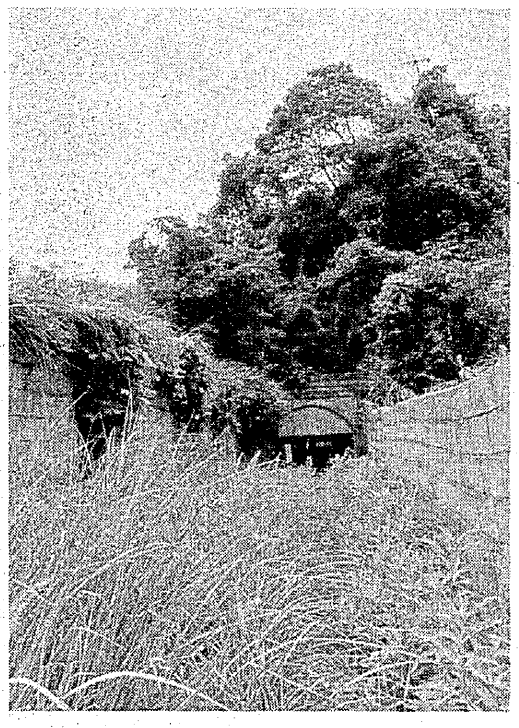
「若干ノ坑夫ハ救出スルノ途ナク、本日（二十三日）午後六時ニ至リ坑口ヲ全ク密閉セリ」、と公部省沿革報告は述べていますが、このとき、からくも救い出されたのは坑夫数十人に馬十三頭に過ぎませんでした。

なかには逃れんとした囚人もあったと見えて、団琢磨（三池炭鉱社の初代事務長）は自ら残したその伝記に、そんな囚人は看守の竹槍で刺し殺されたと述べています。

でも、暴動を起こした熊本県の囚人労働者は、そのとき逃げようとする者はいなかったらしく、三池監獄史は、その一節に次のように述べています。

「囚徒等が該坑放火の目的たる、果たして何れにあるか。確認するに由なしといえども、決して逃亡を企て、吏員に暴行を加えんがためにせしものに非ざるなきことを信ぜり。想うに、彼等全坑を灰燼に帰せしめ、永く坑内の苦役を免れんとするにあるを」

囚人労働というものが、果たしてどれほどひどいものだったのか三池監獄史の右の一節がよく物語っているではありませんか。



大浦廃坑の坑口です。今もこの坑口は残っていて、昔の囚人労働の残酷だったことを語りかけてくるようです。

関東不知火会 三川出身者が親睦の集い

十月三日午前十一時から東京労働金庫ホールで、関東不知火会の三川支部出身者の親睦と交流の集いが開かれました。

このところ関東不知火会の全体集会は開かれていませんが、各支部毎の小単位で〝集い〟が持たれており、この日は三十人が集まり、三池闘争や三池での在りし日のこと、三池を離れてから二十年の中での近況などを語り合い、三池の歌ごえも流れました。

この〝集い〟には、折から夕張新鉱問題で上京中の森田組合長も出席、和かに懇談しました。

釣りキチ余談　連載第十五回

ボラ掛け釣り（一）

十一分会（三川）　石田鈍竿

ある日曜日、ボラ掛け釣りでも見に行くかと、寒さにめげず、三池港へ向けて自転車を走らせた。

やっとるやっとる。航路の両堤防に、ずらりと並んだ竿が、魚を誘って上下している。竿は五間から六間竿、餌なしで、大型地獄針での掛かり釣りである。

穂先がぴくっぴくっ。それをゆっくりと持ち上げる。魚が完全に針に乗ったところで、〝ガクッ〟と合わせ、そのまま一気に岸にぶり上げる。なんと豪快な釣りだろう。

俺は、とりつかれたように寒さを忘れ、胸をはずませて穂先を見詰め続けた。独得なものがある。俺が今までやった釣りが、なんだか小さいものに感じた。

その足で釣り具店へ行き、要領を聞いて早速竹倉庫に入り、六間に見合う竹を探し、翌日は特別休暇をとって竿作りにかかった。

いかに竿作りの名（迷）人とはいえ、穂先が親指大、根竿が八センチ以上もある六間の大竿が相手では、一日で完成というわけにはいかない。つぎの潮を待って釣り場へ急いだ。

竿を組み立て、片張り綱をやっとのことで張りはしたものの、主綱をゆるめ竿を前へ押して倒そうとするが、向い風で前に倒れてくれない。

やっと倒れたかと思ったら、竿が横に振れて隣の竿に〝ゴツン〟赤くなったり青くなったりで、長時間かけて、ようやくなんとか竿を操作できるまでになった。しかし、両隣は次つぎに釣り上げるが、俺には一向に魚が乗ってくれない。おまけに、石に引っ掛けてばかりである。

そればかりか、要領が悪いので腰にきてきりきりに痛んできた。

『あんた、そこでどげんシャクッても釣れんばん、壺ば作らんなら……』

『エエーッ』

壺と云うが、どげんかつじゃろうか、と頭をひねった。

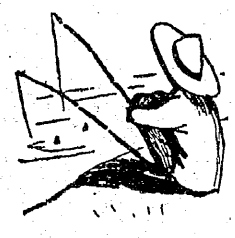
寒さを堪らえて潮が引くのを待ち、壺というものを拵ませてもらった。これもまた、じっくり見るのは初めてである。

ボラの通り道に石垣を築き、遊び場に誘導するのである。ボラが遊び場まで石垣に添って来ればしめたもので、そこには針が上下して待っているという仕掛けである。

『蓄生ッ、こういうことか』

引っ掛け釣りには「種も仕掛けもござる」である。

壺と壺の間の広い所を見つけ、捨て石を運んで見よう見真似でせっせ、せっせと構築した。

習うより慣れろのたとえ通り、励みにはげんだ甲斐あって、なんとかさまになった。

たまには、ボラの刺身が食えるまでになってきたのである。